

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 ハーンのミューズ — 「暗号」 解読の試み —

氏 名 中井 孝子

論 文 内 容 の 要 旨

ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn 1850-1904) は、ギリシャ人の母とアイルランド人の父の間に生まれ、4歳で両親に去られ、大叔母に育てられ、その破産で、19歳で一人、文無しでアメリカに移住し、シンシナティのインクワイヤラー紙で花形記者となった。1877年に移住したニューオーリーonzで、タイムズ・デモクラット紙で文芸部長となり、11歳年下のエリザベス・ビズランド (Elizabeth Bisland 1861-1929) と出会い、生涯の友人となる。

出版社との契約で、1890年4月4日横浜に到着した40歳のハーンは、1904年、54歳で、心臓発作で急死するまでの14年間、1894年から1回の例外 (1903年の出版がなく、1904年に2冊刊行) を除いて毎年1冊、『日本瞥見記』(1894)、『怪談』(1904)、『日本』(1904) 等、計11冊の著作を欧米の読者に向けて英語で刊行した。

ハーンが日本で出版した作品中、晩年の『骨董』(1902)、『怪談』、『日本』を除く、8冊の内容は、坪内逍遙が、田部隆次著『小泉八雲』(1914) で述べたように、所載の小作品間に統一性がなく、その小作品そのものも一貫性を欠くことが多い。本論文は、ハーンの著作の「雑録性」の原因を解こうとすることが、問題意識の出発点であり、それが、ハーンの文学の本質を追究することにつながる考えた。

そのために、第一に、ハーンの文学形成に大きな役割を果たしたセツに注目した。第1部で描いたように、セツの果たした役割が従来の論とは違った、限定的なものであることが一つの判断として考えられた。

日本の定説では、ハーンのインフォーマント (現地出身の情報提供者) であり、ハーンの創作動機を担うミューズ (芸術の源泉) であると考えられてもおかしくないところのセツによる「思ひ出の記」(田部隆次『小泉八雲』所収) や、家族・親戚・周囲の人々の証言を洗い直した。セツの受けた教育を教科書とヘルン文庫に残る、ハーンが典拠とした古典作品との比較から、また家族・親戚・周囲の人々の証言を洗い直し、一雄の2冊の著作や、雨森信成の英語追悼論文、セツ著「思ひ出の記」を比較検討し、丸山学の言う「客観的」な事実を探究することを目的とした。

その結果、セツが版本を読めなかったための書き込みが版本にあったことや、「思ひ出の記」が、

口述を三成重敬が筆記、構成し、能書の人の清書「作品」であったこと、「耳なし芳一」のように原話が複数考えられることから、全面的なハーンの再話の原話提供をしたとされるセツの文章能力の限界を推定した。

特に 1901 年からは、三成が大きく原本の渉猟に関わった可能性があり、ハーンの『骨董』から古典の版本に準拠する作品が現れることをつかんだ。それ以前の 1898 年から 1900 年にかけては、フェノロサ夫妻との交流があり、この時期に作品である『霊の日本』(1899)、『影』(1900)、『日本雑記』(1901)に見られる、読み間違いや、英文の典拠の明示、「能」への言及から、特に文学を通じて懇意であったメアリー・フェノロサからの情報を推測した。

また、第 1 部では、晩年のチェンバレンがハーンの一生が「悪夢に終わった夢の連続」と称したことの意味を検証した。

第 2 部では、ハーンの作品、手紙、伝記、家族・親戚や友人の証言、先行するハーン研究を読み直し、シンシナティのインクワイヤラー紙とニューオーリーonzのチュレーン大学、ルイジアナ州立大学を訪問し、資料を集め検討した。

その結果、ハーンの日本での作品の「雑録性」は、ビズランドが読めばそれと分かる、ハーンのアメリカ時代の新聞記事や、雑誌(『コズモポリタン』)と本に結実した『7 段階世界一周早廻り』のビズランドの果たした旅の記述にある言葉を、あたかもイースター・エッグを隠すが如く、符牒となる言葉を暗号のように用いて、テキスト内に筋との関係に必然性のない、小さな目立たないビズランドへのメッセージを込めようとしたのが、一つの原因であると推測した。

このことは、ハーンがアメリカを去る直前にビズランドに出した手紙の「あなたは魂の蚊をページの間に捜しになさろうとするでしょう。」という表現と一致する。この点を、ビズランドの作品とハーンの作品の作品分析を通じて、詳細に検討した。例えば、「トンボ」「富士山」「アメジスト」「ヒノコ」「赤猫」等である。

また、ハーンはそうした作品に表面的な整合性を持たせるために、思考全体が幻想性をおびせることにもなったりしていると考ええる。また、読み手が内容と題名にずれのある違和感や掛詞によって、メッセージに気づくことを、ハーンが期待した面もある。さらに、あるメッセージを軸にテーマが繋がっている作品と考えられる作品群もある。

ハーンは 1890 年 4 月 4 日に来日後、10 年間の文通休止期間(例外に今のところ 2 通あることが想定される)において、1900 年に文通を約 10 年ぶりに再開した。また、翌 1901 年には、ビズラン

ドに、『日本雑記』を^{デディケート}捧呈した。文通再開以後、ハーンは直接ビズランドと意思疎通するようになり、作品に「暗号」を潜ませる必要がなくなった。また、この時期は、長男一雄を連れて、アメリカに行く計画が現実になる可能性を帯びて来た時期であった。『骨董』、『怪談』、『日本』の内容に、それまでになかった統一性が見られるようになったのは、こうしたためであろう。アメリカへの帰国により、それまでの一年に 1 冊という驚異的な著書出版の労苦から解放されることを見通して、1902 年からは、蓄積しておいた再話をまとめて出版したことが、推測される。このように解釈すると、『日本雑記』(1901)以降の、1902 年発刊の『骨董』、1904 年の 2 冊まとめでの出版である『怪談』、『日本』に、作品内の顕著な統一性が見られることの理由が説明できる。この統一性の出現は、著作としての成熟だったわけではなく、ハーンが所謂「日本卒業」を間近にしていたことの

証左であると考え。また、ビズランドの自伝的小説『理解の灯』（1903）に、ハーンを示す「暗号」が認められ、ハーンからのメッセージが有効だったことを思わせた。

最後の第3部では、ハーンの東京時代の1898年から1899年にかけての2年間に登場した、フェノロサ夫人、メアリーとの交流と影響関係について述べる。『異国情趣と回顧』（1898）、『霊の日本』（1899）、『影』（1900）、『日本雑記』、『骨董』、『怪談』、の表紙にそれまでと違った絵画性が色濃くなることについては、1898年に出会い、翌1899年まで続いたメアリーの影響を、私は考える。上記のように、1898年から1901年までの再話の典拠に、ハーンが、数々の読み間違いをし、英語の論文の指摘をし、能楽への言及をしていることも、この時期に交際していたメアリーの影響の推察を裏付けると考えた。

本論文は、ハーンの著作或いは作品の雑録性が、或る場合においては、ハーンの意図からもたらされたものであることを、ビズランドの作品とハーンの作品の比較分析を通じ、彼らの「暗号」を指摘することによって明示した。また、ハーンの日本作品の「雑録性」を考える過程で、大きな動力を与えた三人の女性の役割がそれぞれ明らかになったと考える。

ハーンの執筆の動機と意識を明確につかむことができれば、ハーンの記事執筆の技術の一端を明らかにすることになるであろう。以上のように、本論文は雑録性を解きほぐすことによって、ハーン文学の本質の一端と、ハーンを取り巻く人間関係の諸事実を追究し、明らかにした。

